

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第15号

目次

アーカイヴズのない国立大学は
消滅統合へ

ー晩冬のフィンランド訪問ー

平井 孝典 2

新しい所蔵資料検索システムの紹介

清水 善仁 4

日誌 8

大学文書館の動き：

『戦後学生運動関係資料』Ⅰ、『戦後学生
運動関係資料』Ⅱ、『第三高等学校関係
資料』の公開を開始しました

..... 9

47人か53人か54人か

ー京大第一期生の数ー

西山 伸 10



京都帝国大学第1期卒業記念写真（1900年7月）

1897（明治30）年に第1期生として入学した学生は、1900年に土木工学・機械工学の両科から29人卒業した（関連記事10頁）。当時の帝国大学の修学年限は現在とは異なり、3年だった。前列中央には初代総長の木下広次の顔も見える。後方の建物は1898年に完成した初代の図書館。

アーカイヴズのない国立大学は消滅統合へ 晩冬のフィンランド訪問

小樽商科大学百年史編纂室 / 研究員 平井 孝典

はじめに

フィンランドは、筆者の住む北海道と同じく雪国で、人口も同じぐらいです。この国には国立大学が大小合わせて20、あります。政府からいくつかの改革目標を提示され、達成できない大学は近くの大学と統合する予定です。要件のひとつが自前のアーカイヴズを維持すること、とされています。複数大学共同で設置維持もOKです。ヘルシンキ大学のアーキビストの一人は、私見として、アーカイヴズの共同の設置や運営は、大学経営の根幹に関わりますから、やがて組織本体の合併につながるだろう、と言っていました。実際、フィンランドの各大学アーカイヴズは会議録や学生資料の保存といったレコードマネジメントに積極的に関与しています。ヘルシンキ大学では、アーカイヴズに所属する現用記録管理担当者が移管すべき「ケース」を各課に伝えます。作成してから数年も経たない資料が、アーカイヴズに移されて行きます。ただし、話は実務的なことだけではなさそうです。国民の多くがアーカイヴズの存在を当たり前、図書館と同じように大学にあるのは当然、と認識するようになったことが背景にあります。組織や社会が将来にわたって存続発展して行く以上、古い資料の管理の問題が生じるのは当然ですし、後述するように、フィンランドの人たちは、アーカイヴズに別の役割があることも知っています。

訪問先について

2008年3月に10日間、科学研究費補助金（若手研究B）で、カレワラと冬戦争の記憶の国を初めて訪問しました。訪問先は、フィンランド文学協会（SKS）のアーカイヴズ部門、国立公文書館私文書部門、そのトゥルク県分館（各県にある分館のひとつ）、ヘルシンキ大学の中央アーカイヴズ（総務部）、トゥルク大学（1970年国有化）の事務文書学生文書を扱っているアーカイヴズ（総務部）、オーボアカデミ（1981年国有化）の大学図

書館アーカイヴズ部門、およびタンペレの生活労働博物館等アーカイヴズ関連施設です。この訪問で得た知見をもとに、表題の背景に関わることの一部を報告いたします。紙数が限られていますので、各施設についての詳細は別の機会といたします。

フィンランドのアーカイヴズ

フィンランドの近代アーカイヴズは、19世紀はじめに、スウェーデン領からロシア領になったときがスタートです。スウェーデンから行政文書等が新しい統治者に返還され、その管理がロシアではなくフィンランド国内で行われることになりました。「自治領」ということで、ロシアとは政治システムそのものも異なり、スウェーデン時代を踏襲しています。公用語はロシアからの独立までスウェーデン語です。アーカイヴズの制度は、主に、ドイツ語圏の影響を受けているようです。

1828年のトゥルク大火後、ヘルシンキに移転する帝国大学では、講義もスウェーデン語で行われ、大学の事務文書もスウェーデン語で作成されました。現在、帝国大学後継のヘルシンキ大学の講義は、フィンランド語、スウェーデン語、英語などで行われますが、事務文書はフィンランド語で作成されます。エリ阿斯・リヨンロット（のちのカレワラ編者）署名のある学籍簿もスウェーデン語の書式です。国立公文書館トゥルク県分館で18世紀の高等裁判所の判決原本を書庫の中で見



補修中のルター派教会文書。アーキビストとは別に補修の専門家が雇われている。国立公文書館トゥルク県分館（2008年3月20日）

せてもらいましたが、もちろんスウェーデン語で書かれています。

ところで、ある国のアーカイヴズ全体をひとまとめに考えますと、例えばアーカイヴズには行政・司法・立法の記録を伝える役割と、その国や社会の人々の文化を伝える役割があると思います。個々のアーカイヴズにはどちらかの役割があったり、両方の役割があったりします。

被支配者であったフィンランド人が自ら設置し一定程度の自由な活動が許されたのは、文化を伝える役割のアーカイヴズでした。カレワラ編纂の成功やのちのフィンランド学派の活躍を指摘するまでもなく、1831年に設立されたフィンランド文学協会（SKS）などのアーカイヴズ活動は学術的にも評価の高いものでした。加えて、カレワラの翻訳を手にし初めてフィンランドの存在を知った人も当時の欧州にはいたようです。フィンランド人自らもフィンランドを意識することになったのでしょうか。フィンランドの人々は、まずは文化を伝える役割のアーカイヴズの活動で、アーカイヴズの重要性を明確に意識したのではないのでしょうか。

収集活動の例 オーボアカデミ

古都トゥルクにあるオーボアカデミはスウェーデン語が主たる言語として使われている大学です。シベリウス博物館もこの附属施設です。この大学はスウェーデン系の人々にとっては、彼らの文化を象徴する組織でもあります。この大学アーカイヴズの成り立ち、がそのことをよくあらわしています。フィンランドの人々にとって、日記などは次世代に伝えるべき遺産です。どこかの施設が引き取ってくれるはずですが、しかし、スウェーデン系の人々から見ると、SKSも国立公文書館やその分館も狭い意味でのフィンランド人の文化施設のように思えます。大切なものを預ける気がしません。そこで彼らがとった手段はとにかくオーボアカデミに資料を寄贈してしまうことでした。それを管理するために設置されたのが大学図書館のアーカイヴズ部門ということになります。今は大学の事務文書も収集しています。同アーカイヴズのホームページではトゥルクの写真もたくさん見ることができます。実は、日本人であれば誰でも

作品あるいはその登場人物(?)を知っているスウェーデン系女性作家の資料もあります。

冷戦の記憶

ロシアのアーカイヴズでは、冷戦時代にKGBが行った、ヘルシンキ等での市民監視活動の記録が見られるそうです。この活動を陰で支えたのが、簡単に言ってしまうと、フィンランド共産党です。となりますと、この文書にも興味がわいてきます。しかし、ソ連崩壊直後の二昔前、共産党そのものは膨大な負債をかかえ破産消滅してしまいました。ところが、今も共産党アーカイヴズは活動を続けています。このアーカイヴズで資料も見られますし、関係資料の寄贈もできるようで、予算の80パーセントは税金で賄われ(100パーセントではないのは一定の「経営努力」をもとめるため)、万が一アーカイヴズが活動を停止した時、活動の継承先がない場合は、最終的には国立公文書館私文書部門がその活動を引き継ぎます。

おわりに

SKSのアーキビストが20人ほどで、国立公文書館のアーキビストは200人以上いるようです。国立公文書館も相対的に規模が大きいようです。前述しましたように、そこにも私文書部門があり、民間のアーカイヴズが収集しきれない文書等を集めています。結果として、一定の価値を有する資料は、少数民族のものも含め、保存先を見つけられるというシステムが確立しました。資料の迷子（ホームレス）をつくらない政策といわれています。資料は、個人や家族あるいは組織のものではなく、フィンランドのものと考えられているのでしょうか。各組織や地域による管理が尊重されていますが、美術品と同じく勝手に処分されても困ります。付言しますと、個々人の資料については、例えば、ヘルシンキ大学の教員の研究資料寄贈先として、大学の中央アーカイヴズ、大学図書館、国立図書館アーカイヴズ部門、国立公文書館私文書部門、フィンランド文学協会、等があります。研究資料に限らず、冬戦争の従軍日誌などもフィンランドの財産と考えられているようです。

新しい所蔵資料検索システムの紹介

京都大学大学文書館助教 清水 善仁

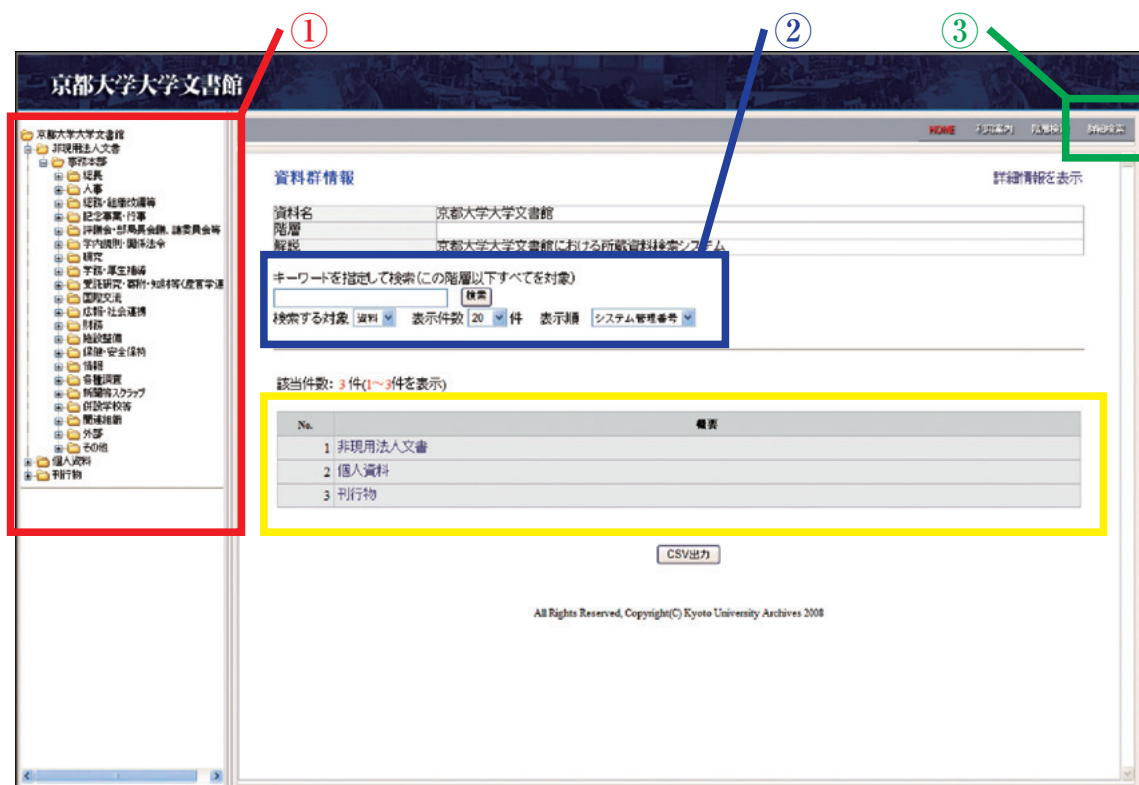
はじめに

京都大学大学文書館（以下、大学文書館）では、2008年9月24日より、新しい所蔵資料検索システムの運用を開始しました。本システムは、2006～7年度にかけて構築作業をおこなったもので、大学文書館が所蔵する資料の検索のための新たなツールとして、多くの方にご利用いただきたいと考えています。そこで本稿では、本システムの検索機能と特色について述べ、その紹介に代えたいと思います。なお、より詳細な使いかたは本稿末尾記載のページを、構築過程の記録については今年度発行予定の『京都大学大学文書館研究紀要』第7号に掲載予定の拙稿を、それぞれご参照ください。

三つの検索機能

これまで大学文書館が提供していた所蔵資料の検索手段は、資料群ごとの Excel ファイルをホームページに掲載し、それをダウンロードした上で目録検索するという、実に手間の掛かる方法でした。

一方、今回新たに構築したシステムは、これまでのそれとは大きく異なり、複数の検索手段を備えています。【図1】の資料検索トップページに付した番号の順に紹介していきます。



【図1】資料検索トップページ

①は「階層検索」のツールです（赤色枠部分）。「階層検索」という言葉はあまり聞き慣れないかもしれませんが、アーカイブズの世界では、比較的多くの機関で採用されている検索方法です。これによって、大学文書館が所蔵する資料を、移管元組織や内容に基づく階層分類ごとに、段階的に検索することができます。上位の階層をクリックすると、そこに含まれる下位の階層が表示され、あわせて右側の画面にも同じ内容が一覧の形で表示されます（黄色枠部分）。どちらの表示画面からも階層を辿ることが可能で、この方法によって目的の資料を絞り込んでいきます。

②は「キーワード簡易検索」のツールです（青色枠部分）。これは主に、階層検索の途中で、

特定のキーワードを用いて資料を絞り込むときに用います。

③は「キーワード詳細検索」です（緑色枠部分）。③の部分をクリックすると、下の【図 2-1】の画面が表示されます。「資料番号」「資料名」「作成者」「キーワード」「年代」の5項目から、目的の資料に該当するような言葉や数字を入力して検索すると、検索結果一覧が表示されます。

【図 2-1】キーワード詳細検索画面



資料名に「総長」と入れて検索すると…

(中 略)

【図 2-2】検索結果一覧表示画面（資料名と階層が表示されます）

以上三つの方法から検索された資料の詳細な情報を知りたい場合は、一覧表示の資料名部分をクリックしてください。すると、その資料の詳細情報が表示され、資料名や作成者、あるいは資料番号やファイル番号など、大学文書館来館時の閲覧請求に必要な情報が表示されます（【図 3】は、【図 2-2】の一覧表示の最初、「総長挨拶（奥田総長）1 S.41.11.24～S.44.6.2」の例）。

京都大学大学文書館	
資料名	総長挨拶 (奥田総長) 1 S.41.11.24～S.44.6.2
階層	京都大学大学文書館 > 非現用法人文書 > 事務本部 > 総長 > 総長挨拶原稿類
資料番号	01A00070
ファイル番号	
巻・号など	
通しNo.	
作成者	所務部庶務課秘書指
発行者	
発行元	
作成年月日 (目)	1966年
作成年月日 (至)	1969年6月
管理担当課・指	総務部庶務課秘書指
関係部課・部局など	-
配架位置	記23-3-2
キーワード	-
備考	-
システム管理番号	100000069

【図 3】詳細情報表示画面

また、検索結果の情報を印刷したい場合は、【図 2-2】の黒色枠部分「CSV 出力」をクリックしてください。検索結果一覧を CSV (Excel) ファイルの形式でダウンロードすることが可能です。

特色

このような複数の検索機能を持つ本システムは、これまでの Excel ファイルによる目録検索と比較して二つの特色があります。

一つは、上記に示した通り、「階層検索」「キーワード簡易検索」「キーワード詳細検索」の三つの検索方法を取り入れたこと自体が特色といえます。このことによって、組織構成や資料群の構造のなかから目的の資料を探そうとする利用者には階層検索、特定のテーマについて直接検索したい利用者にはキーワード検索、というように、利用者の多様なニーズに応えうる効果的なシステムとなりました。他機関の検索手段においても、これだけの方法を併用しているところは少ないというのが現状です。

もう一つは、資料群横断的な検索が可能になったということです。これまでは、資料群ごとの Excel ファイルのみでしたが、本システムには、非現用法人文書、各種個人資料、学内刊行物のデータが登録されていますので、一つの言葉や事柄をキーワードとして設定し検索すれば、利用者が想定しなかったような資料をも検索され、多くの発見が期待できます。

おわりに

今回運用を開始した所蔵資料検索システムでは、大学文書館が所蔵する資料約 16 万点のうち、およそ 2 万点のデータを検索することができます。これは、すでに原本資料を公開している資料の数にほぼ対応するものです。今後は原本資料のさらなる公開と同様に、登録データの規模の拡大にも努めていきたいと思います。

あわせて、本システムの運用にあたっては、利用者からの声は何より重要であると考えています。利用の際に感じた不満や問題点などがありましたら、是非大学文書館までご意見をお寄せく

ださい。頂いたご意見をもとに、さらに使いやすいシステムに改善していきたいと思いますので、多くの方に本システムをご利用いただきたく、よろしくお願いいたします。

京都大学大学文書館所蔵資料検索システム 基本情報

◆アドレス <http://kensaku.kual.archives.kyoto-u.ac.jp/bunshokan/index.html>

※大学文書館ホームページに本システムへのリンクが貼られています。



この部分をクリックすると【図1】の画面が表示されます。

【図4】 検索システム全体のトップページ

◆システムの使いかた <http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/use.pdf>

※実際の画面を用いて本システムの使いかたをより詳しく紹介しています。このページも、大学文書館ホームページにリンクが貼られています（クリックすると PDF ファイルが開きます）。

◆登録データ件数：20,858 件（2008 年 9 月 24 日現在）

〔内訳〕 非現用法人文書：5,511 件 / 学内刊行物：3,437 件

個人資料

木下広次関係資料：1,083 件 / 鳥養利三郎関係資料：440 件

学友会関係資料：4,262 件（件名数） / 第三高等学校関係資料：4,948 件

戦後学生運動関係資料Ⅰ：678 件 / 戦後学生運動関係資料Ⅱ：515 件

本システムに関するお問い合わせやご意見などがございましたら、大学文書館メールアドレス（archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp）までお寄せください。

[日誌] (2008年4月～2008年9月)

- | | |
|--|---|
| <p>2008 / 4 / 1 笠井晶二氏より、医学関係資料等寄贈。</p> <p>4 / 2 河西助教、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。</p> <p>4 / 30 『京都大学大学文書館だより』第14号発行。</p> <p>5 / 2 学外より、京大出身の寮歌作詞・作曲者について照会。</p> <p>5 / 12 大学文書館教員会議。</p> <p>5 / 19 笠井晶二氏より、京大バレーボール部関係資料等寄贈。</p> <p>5 / 19 小山登氏より、『球影』（第三高等学校排球部発行）寄贈。</p> <p>5 / 27 若井勲夫氏より、京大11月祭関係資料寄贈。</p> <p>6 / 7 京都橘大学より、大学文書館施設見学のため来館。</p> <p>6 / 12 清水助教、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会資料保存委員会主催の「アーカイブ基礎セミナー・ゼロからの資料保存」に出席（於・大阪大学）。</p> <p>6 / 13 政策研究大学院大学より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。</p> <p>6 / 13 梅溪昇氏より、文学部関係資料等寄贈。</p> <p>6 / 16 大学文書館教員会議。</p> <p>6 / 16 田中美千代氏より、田中真人関係資料寄贈。</p> <p>6 / 30 武藤純子氏より、武藤一雄関係資料寄贈。</p> <p>7 / 8 西山准教授、京大サロン・トークにおいて「再発見！京都大学の歴史」と題して講演。</p> <p>7 / 22 笠井晶二氏より、京大バレーボール部関係資料寄贈。</p> <p>7 / 22 事務補佐員中川未来雇用。</p> <p>7 / 23 学外より、京大出身の学徒兵につき照会。</p> <p>7 / 28 大学文書館教員会議。</p> <p>8 / 5 霊長類研究所・山岳部・野生動物研究センター主催企画展「アフリカ、南極、ヒマラヤ」開催（～10月5日。於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。</p> | <p>8 / 7 オープンキャンパス2008開催（～8日）。</p> <p>8 / 7 わだつみのこえ記念館に時岡鶴夫関係資料貸出（展示会使用のため、8月18日まで）。</p> <p>8 / 25 大学文書館教員会議。</p> <p>8 / 26 事務本部各部署および各部局の文書管理担当者を対象に、法人文書ファイル移管に関する説明会を開催（於・楽友会館）。</p> <p>9 / 2 西山、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。</p> <p>9 / 10 附属病院看護部より同部関係資料寄贈。</p> <p>9 / 10 学内より、昭和23年度の文学部非常勤講師について照会。</p> <p>9 / 12 清水、全学教育シンポジウム「京都大学における教育の現状と将来を考察する―第Ⅰ期から第Ⅱ期へ向けて―」に出席（～13日。於・兵庫県立淡路夢舞台国際会議場）。</p> <p>9 / 16 中塚明氏より、京大天皇事件関係資料寄贈。</p> <p>9 / 21 河西、歴史学研究会総合部会主催の「公文書管理法と歴史学―有識者会議中間報告の射程と課題」に出席（於・東京大学）。</p> <p>9 / 22 西山、公文書の評価選別業務視察のため、沖縄県公文書館へ出張。</p> <p>9 / 24 学外より、京大出身の学徒兵につき照会。</p> <p>9 / 24 大学文書館所蔵資料検索システムの運用を開始。</p> <p>9 / 29 大学文書館教員会議。</p> |
|--|---|

大学文書館の動き

『戦後学生運動関係資料』Ⅰ、『戦後学生運動関係資料』Ⅱ、『第三高等学校関係資料』の公開を開始しました

大学文書館では、『戦後学生運動関係資料』Ⅰ、『戦後学生運動関係資料』Ⅱ、『第三高等学校関係資料』（第二期分）の公開を9月24日に開始しました。

『戦後学生運動関係資料』Ⅰは、1950年代前半の京都大学を中心とした学生運動に関係した資料群です。京大の学生自治会、京大生の有志的団体、外部の諸組織等によるビラ、定期刊行物等が中心を占めます。内容としてはレッドパージ反対運動、破壊活動防止法反対運動のほか、京大天皇事件に関する資料も多く見られます。

『戦後学生運動関係資料』Ⅱは、同Ⅰに引き続き1950年代後半の京都大学を中心とした学生運動に関係した資料群です。Ⅰと同様、京大の学生自治会や京大生の有志的団体、外部の諸組織等によるビラ、定期刊行物が中心を占めます。内容としては、荒神橋事件、第二次滝川事件に関する資料が数多く見られます。

両資料は、これまで資料の公開がほとんど進んでいなかった占領末期から60年安保闘争直前までの学生運動について、実証的研究を行う基盤を提供するものと期待されます。なお、両資料についての解説・目録を収録した『『戦後学生運動関係資料』解説・目録』が大学文書館の編集によりすでに刊行されています。

『第三高等学校関係資料』（第二期分）は、昨年度公開を開始した同資料に次ぐものです。昨年度は、第三高等学校およびその前身校が明治2（1869）年から1887（明治20）年までに作成した公文書を主に公開しましたが、今年度は1888年から1917（大正8）年までの公文書2691点（個人情報記載による閲覧不可の文書を除く）を公開します。京都移転から高等学校令制定を経て旧制高等学校として確立していく時期の第三高等学校の歴史を物語る資料です。1918年以降の同資料についても現在整理を行っており、できるだけ早い公開を目指します。

いずれの資料も、資料の長期保存および円滑な利用のため、一部の簿冊をマイクロフィルムに撮影しています。閲覧にあたっては、撮影分についてはその紙焼をお願いすることになります。また、冊子体の目録を閲覧室に配架し、目録データを大学文書館ホームページ（<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html>）に掲載しています。



第三高等学校関係資料（一部）



戦後学生運動関係資料（左がⅠ、右がⅡ、ともに一部）

47 人か 53 人か 54 人か － 京大第一期生の数 －

京都大学大学文書館准教授 西山 伸

京都大学の創立は 1897（明治 30）年 6 月、当初は理工科大学（現在の理学部・工学部）の土木工学科・機械工学科のみが設置された。この時両学科に入った、つまり京大の第一期生は果たして何人だったのか。京大のホームページや、いわば正史である『京都大学百年史』資料編 3 を見ると、47 人と記されている。「赤穂浪士」ではないが、まことに覚えやすい数字である。この数字の根拠の一つは、大学の基本的データを掲載して当時ほぼ毎年発行されていた『京都帝国大学一覧』であり、最も古い 1898 年発行分に理工科大学学生姓名として 47 人の氏名が並んでいる。また、もう一つの根拠は『文部省往復書類』（大学文書館所蔵、資料番号 01A21134）で、これには 1897 年 10 月 18 日発送の文部省への報告が載っており、同年 9 月末現在の数字として、土木工学科 31 人、機械工学科 16 人で合計 47 人の学生が在籍中となっている。

ところが、この年 9 月 13 日に催された京大初の宣誓式（現在の入学式、当時は学年は 9 月に始まっていた）で、初代総長木下広次は式辞のなかで「今回入学せらるべき学生諸君の数は五十三名にして」と述べているではないか（『京都大学百年史』資料編 2、928 頁）。これはどういうことなのか、総長が最初の入学者数を 6 人も間違えることなどあるのだろうか、一体第一期生は本当は何人なのか、実は以前から気になっていた。

前述の簿冊『文部省往復書類』を改めて繰ってみたところ、翌 1898 年 2 月 23 日発送の学生数（1897 年 12 月現在）に関する文部省宛の報告が見つかった。それによると、入学者は土木 32 人、機械 22 人の 54 人となって

いる。そして機械工学科の 7 人はすでに退学しており「東京帝国大学ニ転学セシモノナリ」と付記されていた。これは前年 10 月の報告には全く書かれていなかった内容である上に、土木と機械の内訳が異なっている。従って若干不正確な資料であるとの非りは免れない（木下式辞にある「五十三名」もこのような不正確さのなせる業かもしれない）が、この資料に依拠すると、前年 10 月の報告が正しければ宣誓式から 9 月末までのわずか半月間に、そうでなくても年末までには最初に入学した機械工学科の学生の約三分の一が退学して、東大に移ったことになる。

入学直後に退学・転学したとされる 7 人の氏名は分からないし、もちろんその事情も不明だが、海のものとも山のものともつかぬ新設大学ではなく、工部大学校以来の伝統を持ちすでに教育機関として確固たる位置にあった東大の工科大学を改めて選んだ気持ちも理解できなくはない。実際創立直後の京大にはその前途を危ぶむ意見もあった（例えば「京都帝国大学に対する世論」『教育時論』第 441 号、1897 年）。そうだとすると、当時の京大関係者には、やはりこの事実はショックを与えたのではないか。京大が先発の東大と異なる個性を強く打ち出して、学生あるいは広く社会にアピールしていくことになる契機はこういうところにもあったのではなかろうか。

ちなみに、京大で勉強を続けた 47 人の第一期生のうち、3 年後の第 1 回卒業証書授与式（当時は 3 年制）をもって卒業できたのは 29 人に過ぎず、14 人が遅れて卒業、4 人については卒業を確認できなかった。